

松岡 洋子

関西学院大学大学院社会学研究科 博士後期過程

高齢者住宅居住者の主観的幸福感と要因に関する国際比較調査
～日本とデンマークを較べて～

「住み慣れた地域で、最期まで自分らしく暮らし続ける（地域居住）」ために、施設から高齢者住宅へと地域での高齢者居住の基盤は大きく変わりつつある。そこで本研究では施設建設中止ののち、住まいとケアの分離をはかって特異な高齢者住宅の発展を遂げたデンマークに着目し、両国の居住者の幸福感に影響を与える要因を包括的に探り、比較して日本への示唆を得ることを目的とした。

両国における高齢者住宅居住者を対象とした質的調査（面接、M-GTA）の結果、「居住継続への不安（確信）」「気分の外向と交流」「緊急時の安心感」「自立の生きがい」「なじみある環境」などの要因が抽出された。量的調査では、年齢、収入、身体障害（健康状況）、社会的ネットワーク、住宅への満足感も含めて重回帰分析したところ、幸福感への有意な影響が認められたのは、日本では「緊急時の安心感」、デンマークでは「居住継続への確信」「気持ちの外向と交流」「医療への非依存」であった。住宅への満足感は、共通して影響が強かった。